いま障害児者をとりまく状況はきびしさを増し、孤立が深まっています。全国障害者問題研究会は、1967年に結成し、障害児者やその家族、関係者がつながり、ねがいを語り合うことを大切にしてきました。そんな語り合いは、一人ひとりわたしらしく生きる社会をつくっていく力になります。今回は、そんな全障研の魅力のつまった特集です。

つながって、わたしらしく

みんな同じ立場で

全障研和歌山支部　兼本直幸

青年期集会（茨城）の全体会にて

人間のねうち

ぼくは、1987年、和歌山大学附属養護学校を卒業して企業に就職しました。先輩にすすめられて、青年学級にも参加するようになりました。手先が不器用だったので、会社でいじめにあいました。毎日仕事に行きたくありませんでした。そんなとき、青年学級のなかまが自分のことのように考えてくれました。「人間のねうちは、見た目や体の障害や頭がよいか悪いかによって決まるものではない。人間のねうちは、その人がどれだけ誠実な人であるかということ、その人がまじめに目標に向かってがんばっているかによって決まる」と言ってくれました。この言葉はぼくの宝物です。みんなに知ってほしいです。

七夕のように

1992年、和歌山で全障研大会が開かれたときに初めて全障研と出会い参加しました。次の年は新潟で、次の年は京都です。その後もほとんど毎年、参加してきました。レポートも報告してきました。青年期集会にもずっと参加してきました。集会がなくなってさびしいです。

全障研大会や青年期集会に参加すると、七夕のように年に一度なかまと会えるのが楽しみです。障害者も研究者の先生方もみんな同じ立場で、やさしい人ばかりです。今ぼくは、全障研和歌山支部の事務局員として、会議はもちろん、講座の準備や受付など自分のできることでがんばっています。

ぼくは、いこいの家共同作業所で働いています。仕事は大変ですが、全障研があるから、全障研のみんなもがんばっていると思うから、みんなに会うことを楽しみにして、がんばります。

進むべき道を示してくれた

全障研栃木支部　木滑シズ子

私には交通事故で障害を負った9歳下の妹がいます。1966年、宇都宮に開校した肢体不自由児支援学校に、3年生で入学しました。保育士になるため宇都宮にいた私は、寄宿舎にいる妹をよく訪ねていました。そこで寮母さんから学習会に誘われ、参加したのが全障研との出会いでした。

1968年、私は知的障害児施設の重度棟に就職し、栃木の仲間と全障研の関東ブロック大会に参加して、田中昌人先生の発達保障の話を聞きました。むずかしいけど学びたい、とその後何年も講座に通いました。重度棟での仕事は、すぐに腰痛になるほどの重労働でした。でも、後輩が5人も次つぎと就職してくれ、学籍もない子どもたちの生活を豊かにするために、保育内容や食事、入浴等の改善にとりくみました。同じ志をもつ仲間とともに子どもに向き合うことの楽しさと充実感を十分に感じた5年間でした。

ここにも仲間が

1973年、結婚を機に宇都宮の通園施設に変わりましたが、ここにもたくさんの全障研の仲間がいました。私たちは保育士を中心とした教育サークルを立ち上げ、全障研の先生の著書や『みんなのねがい』で学びながら、40年以上、今も続いています。二つの母親サークルも10年を経過し、お母さんたちをつないでいます。そのなかで生まれた、家族も一緒に踊っているアフリカンダンスのサークルは、子どもたちの生きがいになりそうな勢いです。

この50年を振り返るとき、私の進むべき道をいつも示してくれた全障研に出会えたことを感謝しながら、みんなが輝ける居場所となるサークル活動を、これからもできる限り続けていきたいと思います。

たくさんの仲間と

全障研愛知支部　奥村芳春

きょうされん大会（愛知）開催に向けてアピール

全障研と出会ったのは1977年の全国大会のときでした。

ぼくは名古屋養護学校を出て名古屋ライトハウス「光和寮」に入所しました。そこでは活版印刷の仕事をしました。その4年後に名古屋ライトハウスを退所し、一宮市に戻りました。そして、その数年後に今のコスモス福祉会の前身の明日香共同作業所づくり運動をたくさんの仲間たちと始めました。

訴えることを覚えた

ぼくはこの当時から全障研の権利保障の影響をうけ、要求運動にかかわっています。それから全障研の会員になり、各地の全国大会や学習会に参加して全国にたくさんの仲間をつくっています。この運動によって本などを読むことと自分の思いを文章にしてみんなに訴えることを覚えました。

学生や若い職員に障害者の思いを聞いてもらうためにも、全障研に加わってほしいと思います。